

第2章

Alfaに初出勤

1972年1月3日、その朝は寒く、空気が澄んでいました。

前の週の金曜日まである配送会社の Saronno (サロンノ) 支店でわたしは経理の仕事をしていました。Alfa Romeo への転職を上司に伝えると、賞賛の目でわたしを見つめて言いました。「きみは運がいい、Lombardia (ロンバルディア) の産業界で輝くダイヤモンドが Alfa Romeo だ。栄光に満ちている・・・究極のマシンの数々を創り出したメーカーだよ」「それはよく存じています、Alfa に働きに行くのですから。わたしの夢がかなったのです」と答えました。



その朝わたしは Saronno 駅を 7 時 15 分に出発する列車に乗りました。列車は混んでいて Milano (ミラノ) の学校に行く学生でいっぱいでした。彼らの話し声は耳に入ってきましたが、会話は頭に入ってきませんでした。考え事をしていたのです。新しい人生の始まり・・・多分「お気楽」には行かないのでしょうか。交通渋滞、寒さ、スモッグに満ちた Milano の中に突入していくのに耐えられるのかしら?・・・たくさんの? (クエスチョンマーク) が頭の中でぐるぐる回っていました。「何をすることになるの? どんな仕事なの?」わかっていたのは、Direzione Assistenza Scuola (サービス教育部) にこれから行くということだけでした。

Bullona (ブッローナ) のバス停で降りてから Via Gattamelata (ガッタメラータ通り) にある正門への道のりを、まるでレーシングコースを駆け抜けるように歩いていました。早足になったのは、すこしも寒さを感じないようにするためというだけでなく、到着することへの不安のためでもありました。正門で守衛に写真を提示し無事通過したときでした、美しい光景を目にしたのです。3 台の Alfa・・・白い Giulia 1600 Super、赤い 2000 GT Veloce、そしてオレンジ色の Montreal が駐車していました。初めて見た Montreal の美しさには息を呑みました。なんという幸先のいいスタートなのでしょう。ラインオフした“sprint (スプリント)” が積載車に乗せられているあたりに Direzione Assistenza Scuola (サービス教育部) があると聞いていましたが、正門から内部右側奥のほうにあるので、たどり着ける人は多くなかったみたいです。わたしは突然目にした巨大なドアにびっくりしました。プラスチックの重そうなシャッターが付いたそのドアは入ってきた車両に押し出されて開くのです、あたかも薄いベールの翼のように。脇のほうには 2 つの普通のガラス扉があり、その先は受付の部屋に通じていました。ゴムとガソリンの臭いを我慢しながらあたりを見まわしました。リフトアップされた車両や、ブルーのオーバーオールを着用して動き回る作業員を。彼らのブルーのオーバーオールには白く刺繍された見事な筆記体・・・Alfa Romeo・・・の 2 文字が浮かび上がっていました。わたしは最終面接を受けたオフィスのドアを開け、中に入っていました。中には入社試験のときの試験官 Guglielmi (グリエルミ) 氏がいて、わたしを温かく歓迎してくれました。それから Lisi

2^ capitolo

(リージ) 氏にわたしを紹介してくれました。(ずいぶんと時が経っていて名前をすべて思い出せなくて、姓だけで申し訳ありません) Lisi氏はその後一緒に仕事をするようになる同僚でした。わたしのボスはエンジニアのCargnelutti (カルニエルッティ) 氏でしたが、ほとんど関わりのない人で、彼がオフィスに入るときにわたしの前を通り過ぎるときに挨拶する程度でした。わたしの背後には執筆機があり、書類が山積みになっていました。(運命ですね・・・) テストエンジニアがイタリア国内出張または海外出張から帰るとその机で手書きのレポートを書いて報告したのです。それらは技術的なメモなのですが、時には筆跡がめちゃくちゃで読解不能なレポートを書く人もいました。処理待ちの書類が山積みされたのは、担当者が3ヶ月休職していたためでした。わたしは書類の整理に着手し、処理に困ったときにはLisi氏に助けを求めました。

2日目にはかなりドキドキした事件がおきました。執筆機の上にマイクロフォンがあることに気づきましたが、何のために使われるのか見当もつきませんでした。旧式のタイプライターの頑固なキーを打つことに一生懸命になっていると、「作業現場にいる人に電話がかかっているので、マイクロフォンでアナウンスして彼を呼び出してほしい」とLisi氏がわたしのところに来て言ったのです。血の凍る思いをしました。わたしはひどく内気で、何かをするときや何かを習うときに、いつも過度に緊張してしまうのでした。ですから、厚かましい顔して「Galiziaさん電話がかかっています、Galiziaさん電話です!」と大きな声でアナウンスできるわけもなく、震えた声でアナウンスしたわけです。数分後、オフィスのガラス越しに見えたのは、10人ほどのブルーのオーバーオール作業員。・・・「どうしてこんなにたくさん来ちゃうの? 一人しか呼んでないのに!」でも、すぐにわかりました。女っぽい声のアナウンスにびっくりして、その声の持ち主が誰なのか知りたくて集まってきたのです。このような温かい出会いで「彼らに失望させられることはないだろう」と確信し、そのとき初めてこのScuola Assistenza (サービス教育部) という大きな家族の一員になったような気がしました。

それではまた!

[Elvira Ruocco \(elvira.ruocco@alfasport.net\)](mailto:elvira.ruocco@alfasport.net)